フレーベル思想における
成長・発達の原点としての乳幼児期

北　後　佐知子

〔抄　録〕

本論文では、フリードリヒ・ヴィルヘルム・アウグスト・フレーベル（Friedrich Wilhelm August Fröbel 1782-1852）が『人間の教育』（1826）でフレーベルが重視している「合一（Einigung）」と「分離（Trennung）」、および『母の歌と愛撫の歌』（1844）において重視している「一致」と「分離」の問題に注目しながら彼の成長･発達論に迫る。そこでは、幼児をどう捉えるかという地平から展開される人間学的な成長・発達論が見出された。フレーベルの成長・発達論はこれまで、「子どもを教育する」ことへの関心から、彼が呈示した教授法とともに多く語られてきた。しかし「自分自身を教育する」ことの重要性を明らかにしようとするフレーベルが、繰り返し強調する〈乳幼児期の意味〉についてはほとんど語られてこなかった。本稿では、フレーベルが「合一」、「分離」を動的に経験しながら成長する人間の原点に、乳幼児期を位置付けていることについて考察したい。

キーワード：合一，一致，分離，乳幼児，少年

はじめに

今日「生涯教育」という概念が普及していることからもわかるように、人々は生涯における教育の必要性を感じている。とはいえ、その実態は技術を伝授し、資格を付与する場を提供するにすぎないものも少なくない。人は、人生の転機に直面した時など、生活そのものを見直すことで己を変化させる。ここではその変化の過程を教育と呼びたい。日々の生活と一体に存立しうるものこそ教育である。そのように考えれば、連続的で多様な関係性のなかで人間らしさを育みながら自己形成していくところに教育の出発点はある。

フリードリヒ＝ヴィルヘルム＝アウグスト＝フレーベル（Friedrich Wilhelm August Fröbel 1782-1852）は『人間の教育（Die Menschenerziehung, die Erziehungs=, Unterrichts=, und Lehrkunst, angestrebt in der allgemeinen deutchen Erziehungsansta lt zu Keilhau）』（1826）から『母の歌と愛撫の歌（Mutter-und Kose-lieder）』（1844）を通して、乳児から幼児、少年への成長における生活に即した教育の重要性を強調する。

本稿では、『人間の教育』（1826）でフレーベルが重視している「合一（Einigung）」と「分離（Trennung）」、および『母の歌と愛撫の歌』（1844）において重視している「一致」と「分離」の問題に注目しながら彼の成長･発達論に迫る。というのも、フレーベルが提起した「合一」と「分離」の問題は、幼児をどう捉えるかという地平から展開される人間学的な成長・発達論が見出されるからである。ジャン＝ジャック・ルソー（Jean-Jacques Rousseau, 1712 -1778）やヨハン・ハインリッヒ・ペスタロッチ（Johann Heinrich Pestalozzi, 1746-1827）の流れを汲みながら展開されるフレーベルの成長・発達論はこれまで、「子どもを教育する」ことへの関心から、彼が呈示した教授法とともに多く語られてきた。[1] しかし『人間の教育』執筆の時点ですでに、フレーベルが時間的な順序やそれぞれの時期の固有性を超えたところでも幼児期の重要性を捉えようとしていたことはあまり注目されてこなかったように思われる。つまり「自分自身を教育する」ことの重要性を明らかにしようとするフレーベルが、繰り返し強調する〈乳幼児期の意味〉についてはほとんど語られてこなかった。本稿では、その点に着目し、フレーベルが「合一」、「分離」を力動的に経験しながら成長する人間の原点に、乳幼児期を位置付けていることについて考察したい。

1.　少年（Knabe）としての人間とは　―幼児との関連

フレーベルは、『人間の教育』において、少年（Knabe[2]）としての人間を、幼児（Kind）としての人間とは異なる性質を有した存在として位置付けている。

本章では、フレーベルが少年期の中心的な教育目標とした「意志の形成」に着目し、彼がとらえた少年の特徴を浮き彫りにする。

(1) 対象との外的分離と内的合一

フレーベルが、少年と幼児のあいだに見出した異質性の主たるものとは、「人間」と「対象」と「言葉」の関係性である。この幼児から少年への成長・発達過程についてフレーベルが記している箇所を引用したい。

> しかし、外的なものとして、また外界として、人間を取りまいているものの全体は、かかるものとして、ひとまとめにされて、人間に認識されうるものではなく、それも、やはり、それぞれ個々の事物や事象や対象に特有の本質や固有の性質の知識を通してのみ、それぞれの独立性と個性において、認識されうるものなのである。中略　さて、人間は、自己の使命に従って、人間を取りまいている外界のそれぞれの事物の本質を正しく認識すべきもの、いやそれぞれの事物の本質に貫入すべきものであるとすれば、また人間は、それぞれの事物を通して自己自身を正しく認識すべきもの、いや自己自身に正しく貫入すべきものであるとすれば、幼児期の段階の後には、人間と対象を合一させる先行の段

階とは本質的に対立するところの、新しい人間の発達段階――人間と対象をふたたび分離し、人間と対象とを外面的には相互に対置させるが、内面的には、合一ないし接近させるところの人間の発達段階――が人間に対して現われてこなければならない。―この段階は、対象と言葉とを分離し、対象と言葉とを、それぞれ、他方から分離されたもの、相互に異なるものとして認識しながら、しかも同時に両者のあいだの内面的な合一関係を認識することによって、対象を人間に内面的に近づけるところの段階である。この段階は、言語そのものが、独立のものとして、またそれ自身だけで、およびそれ自身によって、成立しているものとして、登場し、出現してくる段階である。それがこの次の段階である。[3)]

フレーベルによれば、人間を取りまいているものの全体は、ひとまとめにされて人間に認識されうるものではない。それぞれの個々の事物は、事象や対象に特有の本質や固有の性質の知識を通してのみ認識されうる。フレーベルにおいて、人間をとりまいているものの全体を認識するということは、それぞれの独立性や個性を認識するということでもあり、何もかもをひとまとめにすることとは区別されている。では、上の引用箇所でのフレーベルの人間理解とはどのようなものか。彼によれば、人間は自己の使命に従って、それぞれの事物の本質に貫入（durchdringen）し、それぞれの事物を通して自己自身に正しく貫入すべきものである。事物や自己自身にしみとおる（durchdringen）べきだというフレーベルの理解に沿うと、幼児期の後には必然的に新しい人間のありようがあらわれてくる。それが「先行の段階とは本質的に対立するところの、新しい人間の発達段階」であり、『人間の教育』のなかの「少年期の人間」にあたるところである[4)]。人間は、人間と対象を合一させる存在（幼児）から、人間と対象をふたたび分離し、人間と対象とを外面的には相互に対置させるが、内面的には合一ないし接近させる存在（少年）へと変容していくのである。

幼児から少年へと存在のあり様が変化する際、とりわけ大きな意味・役割を担うものとして言葉がある。 フレーベルは、人間が言葉と対象を分離させ、それぞれ他方から分離されたもの、相互に異なるものと認識しながら、両者の内面的な合一関係を認識しはじめることを、幼児から少年への成長として捉えた。このことが対象を人間へ内面的に近づけるからである。しかし一方で、言葉と対象の「分離」がはじまる時期ということからは、対象を内面的に近づけるという成長の可能性とは全く逆のことが起りうるとも予想できる。つまり、人間と対象とがばらばらに分断されるという人間にとっての危機をもはらんでいるということである。この点についてのフレーベルの考えに迫りたい。

(2) 幼児から少年への成長

「分離」がはじまる時期においてフレーベルが重視したものは何だったのか。換言すれば、幼児から少年への成長を支えるものとはなにか。それは少年の教育において主要な目標とさ

れる「意志の形成」に着目することで明らかになる。少年は乳幼児期との関連においてどのように成長するのか。フレーベルはその点について次のように述べている。

> ところで、自己の使命を達成し、自己の職分を全うするために、自己を発揮させたり、自己を形成したりする人間の営みは、…間断なく連続的に進展してゆくところの、ある発展段階から次の発展段階へとつねに上昇し続けてゆく分割できないひとつの全体である。― 乳児のなかに喚び起された共同感情から、幼児のなかに、衝動や傾向が発達してゆく。この衝動や傾向が、感情や心情の形成に通じ、そこから、精神や意志の活動が、少年のなかに生じてくる。この意志の活動を意志の強固さまでに高めてゆくことや、したがって、純粋な人間性を、さしあたりまずそれ自身において、かつそれ自身を通して、実現したり、表現したりするために、純粋で強固な、力強くかつ持続的な、意志に生命をふきこみ、これを形成してゆくことが、いまや教授や学校において少年を指導するさいの主要な目標および主要な関係点となる。[5)]

上記のように、フレーベルはまず「人間の営み」について論じている。この、自己の使命を達成し、自己の職分を全うするために、自己を発揮させたり、自己を形成したりする人間の営みとは、人間の成長とも理解できる。その営みを、フレーベルは間断なく連続してゆくところのある発展段階から次の発展段階へとつねに上昇しつづけてゆく分割できないひとつの全体と捉えた。フレーベルは人間の発展（発達）段階（Stufe der Menschenentwickelung）を体系化した先駆者と言えるが、その後の多くの発達段階論とは異なる点がここにあらわれている。まず、これまでもよく言われてきたように「間断なく連続的に進展してゆく」と記されていることである。それゆえフレーベルの成長・発達論は「連続的発展観」や「有機的発展」としてその重要性が認められてきた。加えてここで強調したいことは、フレーベルが、子どもではなく人間の営みから語り始めており、その後あらためて子どもの発達について論を展開させていることである。人間一般と子どもとを併記して論を展開するフレーベルの論理構成は随所に見られる。そのような構成にすることで、読者は人間（大人をふくむ）の存在論に乳児や幼児や少年の存在論を、逆に乳児や幼児や少年の存在論のなかに人間（大人をふくむ）の存在論を読みとることができる。

あらためてフレーベルが捉えた乳児から幼児、少年への成長・発達に着目しよう。フレーベルは、乳児のなかに喚びおこされた「共同感情（Gemeingefühl）」から幼児のなかに衝動（Trieb）や傾向（die Neigung）が発達してゆくと記している。そしてこの衝動や傾向が感情や心情の形成（Gemüts- und Herzensbildung）に通じる。[6)] フレーベルによれば幼児の衝動や傾向から形成される感情や心情から少年のなかに精神や意志の活動が生じるのである。少年としての人間は、そのように生じてきた意志の活動を意志の強固さまでに高め、また純粋な

人間性をそれ自身において、かつそれ自身を通して、実現したり、表現したりする。そのために、純粋で強固な、力強くかつ持続的な意志に生命をふきこみ、これを形成していくことが少年を指導するさいの主要な目標および関係点となるとフレーベルは考えた。では、フレーベルはなぜこのように少年の教育の目標、関係点を捉えらのだろうか。少年期における「意志」の重要性から翻って、その基礎となる幼児期を浮き彫りにしていこう。

> 意志とは、つねに一定の点から、一定の方向をとって、一定の意識された目標や目的に向って、意識的に進んでゆく、しかも人間の存在全体と合致する、人間の精神活動である。意志のこの規定でもって、両親や教育者が、教師や学校が、この年代に、この点に関して、人間ないし少年に対して取るべき態度や、与えるべきことがらの一切が、述べられているし、また規定されてもいる。…したがって、少年の自然のままの意志活動を、真の、正しい意味での、意志の強固さに高めるためには、少年のすべての活動が、少年のすべての意志が、内的なものの発達や形成や表現から出発すると共に、そこへ戻ってそれと関係しなければならない。実例と言葉が、教授がそのための方法であり、手段なのである。… しかし、実例と言葉や、教授と実例が、合一せる全体として働くだけでもまだ不十分なのであって、それらは、純粋善良な心情に適うものでなければならない。そして、この純粋で善良な心情の形成に貢献するものこそ、幼児期の教育である。だからこそ、少年の教育は、ひとえに幼児期の教育に基礎を置くのである。だからこそ、意志の活動は、心情や感情の働きから、意志の強固さは、心情や感情の強固さから、生じてくるのである。前者を欠くならば、後者を達成したり獲得したりすることはきわめて困難であろう！[7)]

フレーベルによれば、「意志とはつねに一定の点から、一定の方向をとって、一定の意識された目標や目的に向って、意識的に進んでゆく」「人間の精神活動」である。しかもここでの意志とは、人間存在全体と合致する人間の精神活動である。少年の教育は意志のこの規定でもって一切が述べられているとフレーベルは言う。つまり少年の自然のままの意志活動を意志の強固さに高めることが少年の教育なのである。そのためには、少年のすべての活動、意志が内的なものの発達や形成や表現から出発するとともに、そこ（内的なものの発達や形成や表現）へ戻ってそれと関係しなければならない。その際フレーベルは、実例と言葉、教授が方法であり手段だと言うが、特に強調されていることは、これらが合一せる全体として働くだけでもまだ不十分だという見解である。フレーベルによれば、実例と言葉や教授と実例は「純粋で善良な心情に適うものでなければならない」のである。かれは、純粋で善良な心情の形成に貢献するものこそ幼児期の教育であり、少年期の教育はひとえに幼児期の教育に基礎を置くと明言している。心情や感情の働きから意志の活動が生じ、心情や感情の強固さから意志の強固さが生じてくるというフレーベルの指摘は重要である。幼児期の人間に心情

や感情の働きを見出し、そこから意志の活動が生じるというかれの理解は、成長とも理解できる「人間の営み」を「ひとつの全体」と捉えたことを裏打ちするものと考えられる。さらに言えば、幼児期の人間に心情や感情の働きを見出したことが、その後のフレーベル思想における保育の原理へと深化していくのである。[8)]

フレーベルのいう「意志」は、ある目的を実現するために自発的で意識的な行動を生起させる内的意欲という一般的な性格を了解しつつも、人間存在の根源的な「精神活動」、「純粋善良な心情に適う」ものとして幼児期の教育なしには存立しえないものと理解されている点に特徴があると言えよう。

2. 幼児としての人間とは　―少年との関連

1-（3）でふれたように、フレーベルは、「意志」の基盤を「純粋善良な心情」とした。そこにはただ漠然としたものではなく明確な源泉、方向、目標につながる幼児期特有の心情でなければならないというフレーベルの強い信念があるからである。その信念はいうまでもなく、かれの宗教的世界観に由来するものであるが、それと同時に幼児をよく観察することからつかんだ確信でもある。

(1) 対象と言葉の合一

フレーベルが、幼児期を人間形成における基礎・原点と考えた理由のひとつは、幼児の生命力およびその幼児特有の世界観に基づいている。フレーベルは、幼児の生命が外界と一体となるさまについて次のように記している。

> …すなわちこの段階の子どもは、身体と精神や、肉体と魂の場合のように、まだ語と事物とを分離することができない。これらは、かれにとっては、なおひとつのものであり、まったく同一のものなのである。この時期の子どもたちの遊戯や遊戯活動が、特にこのことを示している。幼児は、遊戯をしながら、進んで、しかももし可能なら、多くのことを話すものである。遊ぶということと、話をするということは、子どもが現にそこにおいて生きているところの元素である。したがってまた、人間発達のこの段階における子どもは、それぞれの事物に、生命力や感じる能力や話す能力を分与するのである。子どもは、それぞれの事物が、自分の話すことを聞いてくれるものであると信じている。子どもが自分自身の内なるものを、外部に表現し始めるからこそ、かれは、石であれ、木片であれ、作物であれ、花であれ、動物であれ、ともかくかれを取り巻く他のすべてのもののなかにもまた、同じような働きがあると思うのである。[9)]

フレーベルによれば、この段階の子ども（すなわち幼児）は身体と精神や、肉体と魂の場

合のように、まだ語と事物を分離することができない。身体と精神、肉体と魂、語と事物は幼児にとってひとつのものであり、まったく同一のものだとフレーベルは捉えた。フレーベルは、とくに遊戯や遊戯活動が幼児のこのようなありようを示していると言う。幼児にとって遊ぶことと話をするということは子ども（幼児）がそこに生きていることの根源的要素であるとフレーベルは理解した。また、遊戯をしながら多くのことを話すということが、現に生きているところの元素である幼児は、それぞれの事物に生命力や感じる能力や話す能力を分与する。幼児が自分自身の内なるものを外部に表現し始めるからである。自分自身の内なるものを外部に表現し始めるからこそ、幼児は石や木片、作物や花、動物など自身をとりまくすべてのもののなかにも同じような働きがあると思うということである。

ここに1-（1）で述べた少年における「人間」と「対象」（「事物」）と「言葉」の関係性と幼児のそれとの違いがある。フレーベルは、語と事物が分離する前の（人間と対象を合一させる）幼児のありようそのままを重要なものとして認めていたのである。幼児がある美しい花を見たときに感じる喜びは、花そのものが愛らしいからか、花に対する自身の喜びか、花を母親ないし両親のもとへ持って行ってみせるときの喜びか、花を授けられた神を予感する喜びなのか、幼児のきわめて豊かな喜びをいったいだれが分析できようかとフレーベルは言っている。[10] フレーベルは、幼児を大人の一方的な価値観で分析することのできない豊かな存在として捉えたのである。

フレーベルは幼児特有のあり様こそが、人間や社会および世界を分裂や分断の方向ではなく統一の方向へと導く根源のひとつであると考えた。だからこそ、「最も純粋な精神的所産[11]」としての幼児の遊びを教育の中核に据え、不可視な生命力・精神性を可視化するための恩物（die Gaben）を考案したのである。

(2)　幼児期の教育の重要性

フレーベルが、幼児期を重要視した理由には幼児の豊かさ（たとえば生命力）以外にもある。それは、人間は子どもという状態からはじまるという単純かつ確実な事実があげられる。しかしその単純、確実な事実の中に、フレーベルは幼児期をどのように捉えるかという人間学的な観点を織り込んでいる。かれは、幼児（ひとりの人間）にとって外界がどのような意味をもってあらわれるかが重要な問題であると強調する。ここに、フレーベルが幼児期を重要と考えた理由が記されているので長くなるが引用したい。

> なるほど、人間の形成や発達のいろいろな段階の間で、重要さの大小という点から一定の順位を確定したり、決定したりすることはできない。――もっとも、より早いものや最も早いものが、つねにより重要なものであるという諸段階の現われ方の必然的な順序は別であるが。それぞれの段階は、それぞれの位置とそれぞれの時とにおいて、ひとし

く重要である。しかし、この幼児期の段階は、周囲の人々や、まわりの外界とはじめて結合し、合一するものの発達や、これらのものを解明し、理解するための、つまりこれらのものの内的な本質を把捉するための最初の出発点を含んでいるので、きわめて重要である。この段階こそ重要である。なぜなら、発達の途上にある人間にとっては、つぎのようなことこそ、すなわち外界が、かれに対して、高貴なものとして現われるか、それとも高貴でないものとして現われるかどうかということや、外界がより低いもの、死せるものとして、つまりたんに他のものによって利用されたり、消費されたり、破壊されたり、享楽されたりするためだけのものとして現われるか、あるいは自己目的として、高いものや生けるものとして、精神的なものや魂を吹きこまれたものとして、つまり神的なものとして、現われるかどうかということや、また外界が、かれに対して明かるく澄んだものとして現われるか、それとも堕落させ、押しつぶすものとして現われるかどうかということ、さらにかれが、外界すなわち事象を、本来の正しい関係において観察し、かつ認識するか、それともそれを、歪曲された関係において観察し、認識するかどうかということこそ、重要なのであるから。[12)]

フレーベルは、人間の発達について、時間的な順位の必然性という点から、先行するものや最も早いものが、より重要であるといい得るにしても、その時間的順序を離れれば、人間形成や発達の段階は、ひとしく重要だと考えていた。[13)] このことをふまえながら、なおかつフレーベルが幼児期の重要性を強調するのはなぜか。そこからは、フレーベルが、時間的なものを超えたところでも幼児期の重要性を捉えたことが読みとれる。

フレーベルによれば、幼児期の段階は、周囲の人びとや、まわりの外界とはじめて結合し、これらのものの内的な本質を把握するための最初の出発点を含んでいる。それがゆえに極めて重要であることをフレーベルはくり返し強調する。発達の途上にある人間にとって、外界が高貴な生けるもの、精神的なものや魂をふきこまれたもの、神的なもの、明るく澄んだものとして立ちあらわれるか、下賤なもの、死せるもの、利用・消費・享楽されるためだけのもの、堕落させ押しつぶすものとしてあらわれるかどうかをフレーベルは問題にした。というのも、発達の途上にある人間（ひとりの人間）にとって、外界（事象）を本来の正しい関係において観察し、認識するか、歪曲された関係において観察し、認識するかということこそ重要だからである。逆に、外界の内的な本質を把握するための最初の出発点を含む幼児期は、外界すなわち事象を本来の正しい関係において観察し、認識するという人間一般においてたえず確認、検討しなければならない問題をも提起し得るともいえる。ここで言われる「出発点」とは人間の教育（自己教育を含む）における「出発点」をも示唆していると考える。

これまで述べてきたことは、フレーベル自身が、「私の教育法の最も重要なものを示した」[14)] と言っている著書である『母の歌と愛撫の歌』においてより具体的に示されている。次章では、

母との関係性における「一致」（合一）と「分離」の問題をとらえていきたい。

3. 母と子の関係性　における「一致」と「分離」

フレーベルは『人間の教育』から18年の歳月を経て執筆した『母の歌と愛撫の歌』において、生まれて間もない人間と身近な大人（母）との関係性や生活そのものがもつ意味、遊びを通した教育の重要性をより明確に位置付けている。フレーベルは生活のなかでの具体的な場面を提示しながら、『人間の教育』において述べられていた「分離」と「合一」に相当することがらを考え深めている。その際フレーベルは、「分離」に対して「一致」という用語をつかっている。[15] 以下ではこれまでの「合一」のかわりに「一致」という語を用いて、人間の成長・発達をひも解いていきたい。

『母の歌と愛撫の歌』は、「母の歌と愛撫の歌」（全７首、第一部）と、「遊びの歌」（全49首、第二部）、「結びの歌」（全１首）から構成されている。ここでは、そのなかの母と子の関係性が、大きく三つにわけられるという立場から論を進めていきたい。その関係性はまず、一致した存在としての母と子の関係からはじまり、次に媒介を通しての母と子の関係へ、さらに「分離の中の一致、一致の中の分離」関係へと移っていく。ここでは、これら三つの母と子の関係性のそれぞれについてフレーベルの考えを具体的に明らかにする。

(1) 一致した関係

『母の歌と愛撫の歌』の第一部では、「子どもとひとつの生命を感じる母」や「すくすくと育つ子を眺める母」など、新生児との「生命の一致」を感じる母の姿や、子どもが育っていく様子にあたたかなまなざしを送る母の姿が描かれている。歌のタイトルにもあるような、生命的に一致した存在である母と子の関係が第一の関係性であると言える。たとえばフレーベルは「わが子と遊ぶ母」という歌において「母よ、子どもに見られるすべてのものを吸いこみなさい。高い生命の幸福を汲みなさい。そして魂の安らぎの日々のしあわせがどんなに尊い宝であるかを知って子どもにそれを保たせなさい。[16]」と記している。フレーベルは、生まれて間もない子どもの最も近くにいる女性（母）が、その営みを意識的に受け止めることを目指している。ここで重要なことは、子どもは母からなにかを吹き込まれる存在ではないということである。フレーベルは言う。「すべて子どもにあたえることは子どもから取ることと結びついており、あたえることは受け取ることから出発しているのです。[17]」と。フレーベルのこの提言は重要である。母は子どもの生命を吸いこみ、子どもから生命の幸福を汲む。フレーベルは母が「魂の安らぎの日々のしあわせ」の意味、すなわち子どもという生命の意味を認識し、それを保てるよう育むことを重視した。

そしてこの生命的な一致状態から、母（母にかわる人）と子の関係は、徐々に媒介物を通した関係へと変容していく。

(2) 媒介を通した関係

「ぼうやかくれなさい」という遊びでフレーベルは、母と子が心や情操の結びつきを感じるために、媒介物を通すことの必要性を指摘した。この遊びに添えられた説明文に注目することで、ある媒介を通した母と子の関係について述べたい。

> この遊びは、子どもと他の人たちとの内面的な人間的な結びつきや情操の結合を出発点として、それをはぐくみそだてていくようにと、とりあげられたもので、内面的な受けとり方をすれば前の遊びと深い関連をもっています。けれどもこの遊びは、子どもとお母さんとの心の結びつきや、情操の結合をより明確に感じさせ、子どもの内面的ないぶきをいっそう深くつかまえるものです。この深い結びつきを感じさせること、感じることなどが、できるだけいつも同じ媒介物―ここでは騎士や騎手―を通して比較することによって起こるということが、子どもにとっても、あるいは子どもとお母さんのお互いの生活にとっても、たいへん重要なものです。もしそうでなければ、子どもとお母さんとの結びつきは、子どもにとってもお母さんにとっても、物的・道徳的・知的（肉体的・道義的・精神的）な面で、わずらわしい、思わしくない結びつきになってしまいます。この思わしくない結びつきが起こることはさけなければなりません。[18)]

フレーベルによればこの遊びは、子どもと他の人たちとの内面的な人間的な結びつきや情操の結合を出発点として、それをはぐくみそだてていくものである。ここでは、子ども（乳児）と母との心の結びつきや、情操の結合をより明確に感じさせ、子どもの内面的ないぶきを感じさせること、感じることが目指される。その際、フレーベルはいつも同じ「媒介物」を通して比較することが重要だとした。そうでなければ、子どもと母の結びつきはお互いにとって物的・道徳的・知的（肉体的・道義的・精神的）な面でわずらしい、おもわしくない結びつきになってしまうとフレーベルは考えた。

この遊びの特徴的は、「媒介物」（騎士、騎手）を通した「比較」にある。ここでの「比較」とは、子どもに対する母と媒介物の愛情の深さ（精神的な距離感とも理解できる）を比べることである。つまり母と媒介物（騎士、騎手）のどちらにとって子どもはよりかけがえのない存在であるかということを言葉で理解できるように工夫されている。子どもの内なる結びつきを出発点とすることが重要であるが、このことは母と子どもの「お互いの生活」にとって大きな意味をもつ。というのも媒介を通すことで、母と子の結びつきは、内面的な人間的なものとなるからである。だからこそ子どもと母の心や情操の結びつきを感じるためには、ある媒介物を通すことによって生じる「比較」を交えることが重要なのである。ここでは「一致」と「分離」という用語は使われていないものの、「媒介物」が「一致」と「分離」の緊張を保つ存在として登場していると理解できる。

（3）では、具体的な媒介物を介した関係を経て、精神的な関係に至る母と子の関係が描かれた遊びに注目したい。

(3) 精神的な関係

『母の歌と愛撫の歌』において、「一致」と「分離」の問題は、特に「かくれる」特徴をもつ「かくれんぼ」と「かっこうかっこう」のふたつの遊びのなかで取り上げられている。この、「かくれんぼ」と「かっこうかっこう」は、（2）で取り上げた「ぼうやかくれなさい」という遊びにつづく遊びである。「ぼうやかくれなさい」という遊びは、母が子どもを媒介物（騎士、騎手）の目からかばうというものであったのに対して、「かくれんぼ」および「かっこうかっこう」は子どもが自発的にかくれる遊びである。ここでは「かくれんぼ」から「かっこうかっこう」への遊びの発展を追いながら、「一致」と「分離」と人間（主として乳児）の成長との関連を浮き彫りにしたい。

> けれども、しばしばお母さん自身の生活や行いと、子どもとの自然的な、素朴なつながり、つながりというよりぴったり密着してしまっている状態にあっては、かえってそれが誤解され、有益である限界を越えてしまって、お母さんにも、愛する子どもにとっても、有害な作用をおよぼしてしまうことがあります。このことは前の遊びで私たちが発見したことでもあります。ぴったりと一致していても誤解がそこにあると有害な作用をおよぼしますが、反対に分離してしまっている状態は、さらにお互いがわからないでいるための誤解を生じやすく、そのため一致している以上に大きな害をおよぼすことでしょう。[19)]

フレーベルは、母自身の生活や行いと子どもとがぴったり密着してしまっている状態にあっては、どちらにも有害な作用をおぼしてしまうと指摘する。このことは前の遊び（「ぼうやかくれなさい」）と共通する指摘であるが、「かくれんぼ」という遊びにそえられた説明文では分離してしまっている状態がおよぼす害にも注意が向けられている。フレーベルは母と子の関係性において生じる過度な「一致」あるいは「分離」がもたらす誤解を問題にした。「かくれんぼ」という遊びはこのような誤解をさけるよう配慮されたものである。

「かくれんぼ」の次の遊びである「かっこうかっこう」では、外面的な分離が内面的一致を高め、内面的な過度の分離はもとより過度の密着も内面的一致を妨げることがあるということがさらに詳しく描かれているので長くなるが引用したい。

> 「いまさら、かっこう遊びだなんて、ただこれは、かっこうかっこうといいながら遊ぶだけのかくれんぼとちがわないものなんじゃないか」と言うことでしょう。これはもちろんそれと深い関係はありますが、全く異なるものなのです。…それではこのふたつの遊

びのちがいはどこにあるのでしょうか。…前の遊びでは、分離と一致とをより多く、より明らかに意識させることをねらっているので、そのふたつのものがはっきりと分けられていると思われます。ところがこのかっこう遊びでは、そのふたつのものをいわば仲だちしようとしているようです。分離の中の一致、一致の中の分離こそ、かっこう遊びをこれほど特色ある遊びにし、その特色のためにこれほど子どもに好かれる遊びにしているのです。分離の中の一致、一致の中の分離、つまり一致における個性の感情と意識とは、良心の本質であり、土台となるものだといえます。ですから元気に遊ぶかっこう遊びの中で、かっこうという呼び声がその子の全生涯を通じて、その元気な良心の呼び声がやがてより高い霊の一致、精神の一致、最高の存在、神とさえ一致することができるという前ぶれとなります。子どもは決して二度と分けられることはないと感じ、そのことを意識して、おそらく幸福と祝福、平和と喜びを感じることでしょう。[20)]

「かくれんぼ」と同じくかくれるという要素をもつ「かっこうかっこう」という遊びであるが、フレーベルによればこれらふたつの遊びは深く関係しつつも全く異なるものである。その違いとは、「かくれんぼ」が「分離」と「一致」がはっきり分けられているのに対して「かっこうかっこう」は「分離」と「一致」を仲だちしようとしているところである。「かっこうかっこう」の特色は、「分離のなかの一致、一致の中の分離」であるとフレーベルは捉えている。かれによれば、ここでの「分離」が「個性の感情と意識」と言いかえうるものであることは重要である。フレーベルによれば,「一致における個性の感情と意識」が全生涯を通じての「良心の本質」であり「土台」となる。というのも、この良心の呼び声はより高い霊、精神、最高の存在、神との一致の前ぶれとなると考えたからである。

「かっこう」という遊びのなかでの呼び声は母の声である。他の遊びと同様、「かっこう」でもまた、母自身の「最内奥」、すなわち一人の人間としての価値観が問われることをもフレーベルは強調しているのである。

おわりに

本論文では、はじめに『人間の教育』においてフレーベルが、幼児から少年へと成長する人間を「合一（Einigung）」と「分離（Trennung）」という用語で説明しているところに注目した。ここでの「分離」は人間らしさの形成に不可欠なものであり、成長の可能性をあらわすものであった。注意すべきことは、フレーベルがこの可能性と表裏一体なものとして「分離」における人間の危機を予測していたことである。だからこそフレーベルは少年のうちに「意志」を形成することが人間の成長を支えると考えた。ここで重要なのは、この「意志」とは、理性や合理性に根ざすものではなく、幼児期の教育に基礎をもつものであったということである。

「合一」と「分離」への認識は『母の歌と愛撫の歌』においては「一致」と「分離」という

用語でより具体的に説明される。『母の歌と愛撫の歌』では、『人間の教育』同様、一定の分離が精神的な深い一致を可能にすることが重視されていた。特筆すべきことは、その際、フレーベルが母自身の「生活や行い」を問題にしたことである。子どもと向きあうことは、即ち自分自身に直面することであり、自己の教育の出発点を認識することでもある。

フレーベルは、子どもと他（母をはじめとする他者や自然、神）との関係を整えることから、子どもの自発的な成長を援助しようとしたといえる。心をつくされた「自然的な、素朴なつながり」のなかで発揮される子どもの生命の表出や表現は、分離や対立という葛藤を抱えてなお創造的であろうとする生を根底から支えてくれるものだとフレーベルは考えていた。

言うまでもなく教育とは、誕生の瞬間から死に至るまで人間存在を支えつづけるものであるが、その原型を技術の伝達や資格の付与に見出すか、それとも生活に見出すかは、人間にとって大きな問題であろう。

〔注〕

1）たとえば矢野智司は、『子どもという思想』（玉川大学出版部、1995年、pp.78-79）で、「研究者はフレーベルのテキストから、子どもの発達論や教授法を抽出することに熱心」で「子どもの正しい育て方を親に呈示する」という面のみが注目されてきたと指摘している。

2）Knabeとは、通常6歳から15歳くらいまでの少年（男性）を指す。本稿では、原語および翻訳本との統一をはかるために「少年」という言葉を用いるが、少女を含む概念として考えたい。また、出版された『人間の教育』では「『少年前期』でもって人間の人生段階の叙述は中断」（O.F. ボルノウ / 岡本英明『フレーベルの教育学』理想社、1973年、p.100）されているということにも注意して考察したい。

3）フレーベル / 荒井武訳『人間の教育（上）』岩波書店、1964年、p.122

4）フレーベルの発達論にはボルノウが次のように補足している。「このことは、もちろん、少し補足する必要がある。そもそも感覚活動の最も早期の課題がすでに、外界を体得することであった。それゆえ、フレーベルは、彼の典型的な言語象徴論において、感覚（Sinn）、すなわち自発的な内面化（Innerlich-Machung）と解釈している。しかし、この矛盾はただ見かけだけのものである。というのも有機的発展の意味で、それぞれの段階において、全人間性が具現化されているはずならば、それぞれの段階は、あらゆる人間的特徴を含んでいなければならないからである。そして少年期においては、この一般的な人間的特徴が、特に純粋に現われているのである。幼児（Kind）の意味が主として『自己を外部に知らせる（kund tun）、ないし告げ知らせる』ことにあったとすれば、今や重点が、周囲の世界を受け入れることという反対の側面に以降する。」前掲、O.F. ボルノウ / 岡本英明『フレーベルの教育学』p.99

5）フレーベル / 荒井武訳『人間の教育（上）』岩波書店、1964年 pp.127-128

6）『人間の教育』執筆以降、乳幼児の衝動や傾向はフレーベルによって深く考察される。

7）同上書、p.129

8）この点に関する考察は稿を改めて行いたい。

9）前掲、フレーベル / 荒井武訳『人間の教育（上）』p.69

10）同上書、p.71

11）同上書、p.72

12）同上書、p.67-69

13）この点についてボルノーは『フレーベルの教育学―ドイツ・ロマン派教育の華』、p.89 において次のように指摘している。「その際の根本思想は、段階の固有値の思想である。これはすなわち、人間の生の発展に適用すれば次のことを意味する。いかなる年齢段階も、より高次の段階の達成のための単なる手段であってはならず、特に子供の時期は、できるだけ早く成人という目標に達するための、それ自体無意味な単なる過渡期などではなく、あらゆる段階（ここでは子供の時期、さらに後では青年時代）は、その意味を完全にそれ自体のなかにもっている。個々の段階の間には、完全さの量的違いがあるのではなく、個性的特性の質的違いがあるのである。それぞれも段階は、人間存在の原則的に同権の現象形式なのである。」本論文では、幼児期が「成人になるという目標を達するための、それ自体無意味な単なる過渡期」でないものと理解する

14）小原國芳・荘司雅子監修『フレーベル全集第五巻』玉川大学出版部、1981 年、p.265

15）『人間の教育』における「合一」と『母の歌と愛撫の歌』における「一致」の違いは、前者が周囲の人びとや対象（事物）との関係で語られているのに対して、後者は母との関係で語られているところにあると考えられる。詳細な考察は、今後の課題であるが人間の成長・発達において「分離」と対で捉えられている概念としての共通性を読みとることができる。

16）前掲、小原・荘司監修『フレーベル全集第五巻』p.19

17）同上書、p.224

18）同上書 、p.220

19）同上書、p.224

20）同上書、p.228

〔参考文献〕

O.F. ボルノウ / 岡本英明訳『フレーベルの教育学』理想社　1973

荘司雅子『フレーベルの教育学』大八洲出版、1944

小笠原道雄『フレーベルとその時代』玉川大学出版部　1994 年

小笠原道雄『フレーベル』清水書院　2000 年

金子真知子『幼児からの発想』、三晃書房、1999

（ほくご　さちこ　　教育学研究科生涯教育専攻・博士後期課程）

（指導 : 大西　正倫　教授）

2010 年 9 月 30 日受理